

令和 2 年 5 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01095

研究課題名(和文)生態学アプローチによる統合的教授デザインモデルの構築と実証研究

研究課題名(英文)The ecological approach to the integrated instructional model

研究代表者

向後 千春 (Kogo, Chiharu)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00186610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：スケールとメディアに合わせた教授デザインの原則を得ることを目的として、対象としては社会人学生と若年層学生を設定し、オンライン学習と対面学習の形態での実証研究を進めた。大学エクステンション講座の受講動機に関する研究、オンライン学習における自己調整学習方略の研究、通信教育課程で学ぶ社会人学生のセルフハンディキャッピング尺度の開発を進めることができた。また、これらと並行して、レポート再提出方式の実践やグループワークに対する態度尺度の開発、グループワークにおけるグループ分けの原則といった研究を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、生涯学習がよりよい生き方の基盤となる時代を目指している。社会人が自分のキャリアや専門性のためにリカレント教育を受け一方で、より豊かで意味のある人生を送るための生涯学習という方向性がある。どちらも教育の重要な使命であり、それを実現するために、対面とオンラインの両側面を使った学習環境と教育プログラムの開発が必要である。本研究は以上のことを実現するための基礎となるだろう。

研究成果の概要(英文)：In order to obtain the principles of teaching design for scale and media, we conducted an empirical study in the form of online and face-to-face learning with working students and young students as the targets. We were able to advance research on motivations for taking college extension courses, research on self-regulated learning strategies for online learning, and the development of a self-handicapping scale for working students studying in online courses. In parallel with this, we were able to advance research on the practice of the report resubmission method, the development of an attitude scale for group work, and the principle of group division in group work.

研究分野：教育工学

キーワード：eラーニング 生涯学習 自己調整学習 セルフ・ハンディキャッピング グループワーク

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Reigeluth の教授文法が設計者からの視点だとすれば、それが学習者にどう捉えられるのかについては、学習者からどう見えるかという視点が必要となる。人間の思考や判断には、さまざまな認知的制約があり、またバイアスがかかっていることを心理学は明らかにしてきた。Kahneman は、行動経済学という領域を切り開き、人間の判断が瞬時に行われ、また変化に敏感であることを明らかにしてきた。それは必ずしも合理的なものではないが、人間の認知的制約のもとで生態的に最適な方法として進化してきたものだといえよう。向後は、人間が学習にかかわる判断をするときのプロセスを明らかにする研究領域として「学習行動経済学」という名称を提案した。学習に関わる人間の判断もまた必ずしも合理的なものではない。そのしくみを明らかにすることによって、学習支援の方法や教授デザインの改善につなげようとするのが学習行動経済学である。そのデザインは一見合理的でも論理的なものでもないかもしれないが、学習者の側から見てうまく働くデザインを見つけようとするのである。

以上により、教授設計者と学習者の両者の視点が考慮されることになり、教授学習システムの全体を眺めることができる。教授設計者の側は、学習者の人数をはじめとして、時間や場所や道具などの物理的制約と教える内容と目標などの内容的な制約のもとで最適な授業や研修をデザインしようとし、一方、学習者の側はそうしてデザインされた学習内容と学習環境、そして自分の認知的制約のもとで最適な場所と方法を見つけ、学習行動を実行しようとする。このような視点をとることを本研究課題では「インストラクショナルデザインの生態学アプローチ」と名付ける

2. 研究の目的

本研究の目的は、人が学習する環境を学習者の視点からどのように見えるかという生態学アプローチを採用し、1人の個別学習、10人単位のゼミ形式、100人単位の対面授業や対面研修、1000人単位のMOOCというように、そのスケールに合わせて教授デザインを統合することでモデルを構築し、その有効性を実証することである。これにより、パーソナルトレーニング、ピアインストラクション、相互評価、ゲーミフィケーション、問題中心学習(PBL)といった具体的な教授法を、オンライン上でも対面でもより効果的な方法とすることを目的とした。

3. 研究の方法

以上の研究目的に沿って、対象としては社会人学生と若年層学生を設定し、オンライン学習と対面学習の形態での実証研究を進めた。具体的には、通信教育課程で学ぶ社会人学生を対象として、セルフハンディキャッピング尺度を心理学的なアプローチで開発した。また、オンライン学習における自己調整学習方略については、質問紙による調査を行った。また、レポート再提出方式の実践やグループワークに対する態度尺度の開発、グループワークにおけるグループ分けの原則といった研究を進めた。ここでも教育実践の中で得られるデータや、質問紙による調査、またインタビューといった手法で、多面的なデータを取得するようにした。

4. 研究成果

対象としては社会人学生と若年層学生を設定し、オンライン学習と対面学習の形態での実証研究を進めた。これまでに、大学エクステンション講座の受講動機に関する研究、オンライン学習における自己調整学習方略の研究、通信教育課程で学ぶ社会人学生のセルフハンディキャッピング尺度の開発を進めることができた。また、これらと並行して、レポート再提出方式の実践やグループワークに対する態度尺度の開発、グループワークにおけるグループ分けの原則といった研究を進めることができた。こうした研究を進める過程の副産物としてインストラクショナルデザインの領域における研究方法論についても整理し、論文化することができた。

本研究は、生涯学習がよりよい生き方の基盤となる時代を目指している。社会人が自分のキャリアや専門性のためにリカレント教育を受ける一方で、より豊かで意味のある人生を送るための生涯学習という方向性がある。どちらも教育の重要な使命であり、それを実現するために、対面とオンラインの両側面を使った学習環境と教育プログラムの開発が必要である。本研究は以上のことを実現するための基礎となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 石川 奈保子・向後千春	4. 巻 41
2. 論文標題 オンライン大学で学ぶ学生の自己調整学習方略およびつまりき対処方略	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 329-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15077/jjet.41063	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 多喜 翠・伊澤幸代・堂坂更夜香・向後千春	4. 巻 42
2. 論文標題 大学エクステンション公開講座受講生の受講動機に関する調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 141-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15077/jjet.S42072	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村 康則, 向後 千春	4. 巻 42
2. 論文標題 通信教育課程で学ぶ社会人学生のためのセルフ・ハンディキャッピング尺度（SHS-ASCC）の開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 355-367
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.15077/jjet.42114	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 向後千春・伊澤幸代・堂坂更夜香・多喜翠	4. 巻 JSET17-5
2. 論文標題 大学エクステンション講座受講生の受講動機に関する調査	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 195-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石川奈保子・向後千春	4. 巻 JSET17-5
2. 論文標題 オンライン大学の学生のメンターに対する学業的援助要請態度とつまずき対処方略	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 203-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中村康則・向後千春	4. 巻 JSET17-5
2. 論文標題 社会人学生向けセルフ・ハンディキャッピング尺度の検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 251-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 杉浦真由美・石川奈保子・阿部真由美・向後千春
2. 発表標題 オンライン大学の授業におけるレポート再提出方式の導入とその効果
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 向後千春・阿部真由美
2. 発表標題 グループワークについての態度が授業内のグループワークの認知に及ぼす影響
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石川奈保子・向後千春
2. 発表標題 メタ課題を用いたオンライン大学の学生に対する自己調整学習の支援
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村康則・向後千春
2. 発表標題 社会人学生におけるセルフ・ハンディキャッピングの因果関係の検討
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 向後千春・阿部真由美
2. 発表標題 グループワークについての態度はグループワーク中心の授業後はどう変化するか
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川奈保子・阿部真由美・向後千春
2. 発表標題 オンライン大学の授業におけるレポート再提出方式の実践とその効果
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊澤幸代・堂坂更夜香・向後千春
2. 発表標題 大学エクステンション講座の受講者はどのような動機を持っているか
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会発表論文集
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	冨永 敦子 (Tominaga Atsuko) (60571958)	公立はこだて未来大学・システム情報科学部・教授 (20103)	